

建築設計テキスト

住宅

建築設計テキスト編集委員会編

建築設計テキスト編集委員（50音順）

大河内学（明治大学）*
郷田桃代（東京理科大学）*
鈴木弘樹（千葉大学）
鈴木雅之（千葉大学）
高柳英明（滋賀県立大学）
積田 洋（東京電機大学）
福井 通（神奈川大学）
山家京子（神奈川大学）

*印は「住宅」担当編集委員

編集協力：神田綾乃（明治大学大学院）
高森仁美（明治大学大学院）
高橋 功（東京電機大学大学院）
田淵浩子（東京電機大学大学院）

まえがき

建築学や関連分野の専門知識を学ぶ大学や工業高等専門学校、工業高校では、設計製図は基幹科目としてカリキュラムの中で多くの時間を当てている。建築計画や建築構造、建築設備などの講義科目での知識を総じて、一つの建築としてまとめあげる設計製図の実習は、建築の専門家としての技術を習得するうえで極めて大切なものである。

建築の設計は、用途や機能のみならず時代を映す社会的な要請や条件、さらにはデザインを網羅的にとらえて、人間の豊かな生活の空間を提供するように構想して、計画されるものである。設計製図のカリキュラムでは、まず設計図の描き方を学び、各種のビルディングタイプの設計課題を行うように組まれている。多くの学校で設計製図課題となっている「集合住宅」「住宅」「事務所」「商業施設」の設計製図の実習に資する教科書として編まれたものが、本シリーズである。

建築の設計は「住宅に始まり、住宅に終わる」といわれるように、住宅の中に建築のエッセンスが凝集されているといっても過言ではない。設計教育の現場では、住宅の設計課題が必須の課題とされている。人間にとって住宅は身近なものであること、ほかの建築とは異なり、具体的なユーザーの顔が見えること、滞在時間が圧倒的に長いことから、住宅建築は入門しやすいが、奥が深く、高い完成度が要求される難しい建築であるといえる。本書はこうした住宅設計を取り巻く背景を踏まえ、幅広い内容をカバーしつつも、初学者にとってわかりやすい内容を心掛けた。

本書の特徴は以下の3点である。

1. ビジュアルでわかりやすい解説：写真や図面などを数多く掲載し、ビジュアルに把握・理解できるように工夫を行った。実例を掲載することで、実際の設計に役立つことを目的としている。
2. 豊富かつ最新の事例をピックアップ：できるだけ新しい事例を取り上げ、最新の住宅設計のスタンダードをキャッチアップできるように編集した。近年、住宅のあり方は大変多様化しており、いわゆる教科書的なお手本を示すのは大変難しいが、豊富な事例を示すことで、住宅設計の奥深さと問題の広がりを知っていただければ幸いである。
3. 住宅の歴史や設計思想についての解説：設計者の思想や住まい手の価値観が住宅設計の方針を大きく左右する。誌面の制約はあるものの、住宅の成立過程、歴史的変遷を概観する解説をまとめた。現代における住宅設計の中心的課題についても解説を加えている。

本書の構成は、1章で住宅設計の基礎的知識として、住宅の定義、歴史的変遷、現代における住宅設計の中心的課題について解説している。2章では、配置計画から平・断面計画、各室の設計、仕上げ・詳細の設計、構造計画、設備・環境計画といった内容を具体的な事例を紹介しつつ解説している。3章では、様々な住宅作品の中から、参考となる具体的事例を紹介している。1章の「住宅建築の現在」と相互に参照できるように工夫している。4章では、「箱の家108」を題材に、詳細な図面（配置図、平面図、断面図、立面図など）を掲載している。

最後に本書の編集・執筆にあたり、貴重な資料をご提供いただきました設計事務所および関係各位に厚く御礼を申し上げます。

2009年8月

建築設計テキスト編集委員会 大河内 学

目次

まえがき	3	2.6 窓と建具をデザインする	38
1 概要	5	1. 窓、建具の機能的・デザインの意味	38
1.1 住宅とは何か	6	2. 建具の種別	38
1. 住宅の設計にあたって	6	3. 開閉形式	38
2. 住まいの目的と性能	6	4. 工法	38
3. 住まいの多様性	6	2.7 家具をデザインする	39
4. 住宅の定義	6	1. 造付け家具	39
2. 2. 家具・照明	39	2.8 外部(エクステリア)をデザインする	39
1.2 住宅の歴史	7	1. 外部空間の役割	39
1. 近代以降の住宅建築	7	2. 外部空間の設計	39
2. 戦後における日本の住宅	8	2.9 建物の骨組みをデザインする	40
1.3 住宅建築の現在	10	1. 建物に作用する荷重・外力	40
1. 周辺環境・場所性への対応	10	2. 地盤と基礎構造	40
2. 家族・ライフスタイル	10	3. 木造	41
3. 空間構成・平面構成	11	4. 鉄骨造	42
4. エコロジーと住宅建築(環境共生型住宅)	12	5. 鉄筋コンクリート造(RC造)	42
5. 構造・構法・素材	13	6. 混構造	43
6. 「家」の概念の拡張	14	2.10 室内環境をデザインする	44
2 設計・計画	15	1. 温熱環境(熱と空気)	44
2.1 敷地を観察する	16	2. 光環境(採光と照明)	45
1. 敷地と周辺環境の読取り	16	3. 音環境	45
2. 法的条件の把握	17	4. 省資源と省エネルギー	45
2.2 居住者像とライフスタイルを把握する	20	5. 設備	46
1. ライフステージ	20	3 設計事例	49
2. 家族構成	20	1. 日本橋の家/岸和郎+K.ASSOCIATES/Architects	50
3. 仕事・趣味・余暇	21	2. CELLS HOUSE	
4. 予算とスケジュール	21	/大河内学・郷田桃代/インタースペース・アーキテ	
2.3 平面・断面を考える	22	クツ	52
1. 敷地と建物の規模	22	3. 津山の家/村上徹建築設計事務所	54
2. 建物の配置計画	22	4. ヒムロハウス/小嶋一浩/C+A	56
3. 居室の配置計画	24	5. 北向傾斜住宅/三分一博志建築設計事務所	58
4. 内部と外部をつなぐ計画	28	6. 地熱利用のSOHO/圓山彬雄/アープ建築研究所	60
2.4 空間の寸法を考える	29	7. 住居No.18 伊東・織りの家	
1. インテリア空間の設計	29	/内藤廣建築設計事務所	62
2. インテリア空間の寸法	29	8. ハウス&アトリエ・ワン/アトリエ・ワン	64
3. 単位空間の構成	29	4 設計図面	67
4. 断面の設計	33	箱の家108 小野塚邸/難波和彦+界工作舎	68
5. エクステリア空間の寸法	35	【コラム】	
6. バリアフリー	35	鉄板を構造とした住宅	43
2.5 仕上げ・詳細を考える	36	建築物総合環境性能評価システム	47
1. 外部空間	36	次世代省エネルギー基準	47
2. 私的空間	36		
3. 共有空間	36		
4. 衛生空間	37		
5. 動線空間・その他	37		

1 概要

1.3 住宅建築の現在

人々のライフスタイルや価値観の多様化、少子高齢化や単身世帯の急増、コミュニティの崩壊に代表されるように、社会の仕組みそのものが激変しつつある。これに従い、住宅に求められるデザインや性能は、ますます複雑かつ高度なものになっている。住宅建築のあり方やかたちも極めて相対化している。我々はいま、住宅の設計で何を考えるべきであろうか。ここでは、幾つかの事例を概観しながら、住宅建築の広がりや奥深さを理解するとともに、今日的な住宅設計の問題について解説する。

1 から 6 の内容は、それぞれ設計事例の章で取り上げる事例と対応しているので、参考にするとよい。

1 周辺環境・場所性への対応

① 小さな家

都市部では、狭小敷地に小住宅を建設する事例が数多く見られる。狭小敷地に住宅を設計する場合には、限られた容積を有効に活用するために、平・断面計画の工夫、実際よりも広く感じられる巧みな空間構成、無駄のない厳密な寸法設計を必要とする(図 1.21)。1994年の建築基準法改正により、「住宅地下室の容積率緩和」の規定が成立したことで、さらなる地下利用が促進されることとなった(図 2.51)。

② 都市型住宅(事例:日本橋の家。p.50~51)

戦後の高度経済成長期には住宅の商品化が進み、豊かさの象徴として、郊外に庭付き一戸建てを購入し、そこに一生住まうことが理想となった。近年では狭くても都心に居を構え、利便性を享受するという居住形態・価値観をもつ人が増え、都心居住の可能性を追求した住宅が作られている。その多くは狭小敷地で庭がなく、内部空間の重視、高度な空間利用といった特徴をもつ。

③ 風土性(事例:北向傾斜住宅。p.58~59)

建築は土地に定着して成立するものであるから、敷地

をとりまく環境を無視して計画することはできない。世界中のいかなる場所にも建設可能な普遍性を追求した近代建築の反省を踏まえて、その場所の気候、風土などを生かし、その場所にしかない固有の特徴や形式をもつ住居が見直されている(図 1.22)。都市部においても、住宅が街の一部としていかに風景に参加するかという意識が高まっている。

2 家族・ライフスタイル

現代では、従来の核家族を標準とする住宅の設計と異なり、様々な家族形態に応じた計画が求められている。趣味、余暇の過ごし方をはじめとするライフスタイルも多様化しているので、住居のあり方も自ずと個別化している(図 1.23)。

① 多世帯住宅(事例:CELLS HOUSE。p.52~53)

複数の家族が一つの棟に同居する住宅をいう。通常、親と子が同居する二世帯住宅が多い。最近では高齢者の中にも経済的、精神的、体力的に自立した人が多く、完全共有の平面計画の中で、個室を与えられただけでは満足しない人も多い。この場合、完全分離型や部分共有型が望ましいと考える。後者の場合、血縁関係があっても独立した別の世帯が同居するのだから、二世帯の距離のとり方、あるいは共有の仕方に工夫が求められる(図 1.24)。

② 家族構成と空間単位

図 1.25 に示す「梅林の家」(2003)は、3世代が住む住宅である。厚さわずか 16mm の鉄板によって組み立てられた小さな個室の集合体である。各個室は、完全に区画されているわけではなく、壁に穿たれた孔によって緩やかにつながっており、住居全体としては大きなワンルームとしてみることもできる。

図 1.26 に示す「岡山の住宅」(1992)は両親と子供の 3

人が住む住宅である。中庭を囲んで、個室棟、厨房棟、浴室棟が分散して建っている。この住宅では中庭に出て別の棟に移動することを余儀なくされる。個人が個として独立しつつも共有する場をもった住宅である。

③ 非 nLDK(事例:ヒムロハウス。p.56~57)

画一的な住居形式に対する批判が高まり、従来の nLDK 形式では説明できない平面計画を模索する試みが多数の住宅で実践されている。

④ 高齢者の住環境

戦後の住宅は、機能性や経済性を追求するあまり、必ずしも高齢者や体の不自由な人に対して優しい建築ではなかった。近年では建築における「バリアフリー」や「ユニバーサルデザイン」の促進が叫ばれており、住宅もこの例外ではない。我々はさらに高齢者の住環境について検討を深めていく必要がある。

高齢者・障害者にとってのバリアの様態には個人差

があるが、一般的に住宅における「物理的なバリア」として、床の段差などが挙げられ、具体的な対処として、スロープや手すりの設置、廊下や階段幅の適正化などがある。こうした物理的なバリアのほかには心理的、制度的なバリアが存在することも認識する必要がある。

3 空間構成・平面構成

住宅設計のプロセスにおいて、どのような平面を与え、どのような空間構成にするかという問題は、あらかじめ答えが用意されているわけではないので、最も創造力を必要とし、アイデアが求められるフェーズである。計画的に優れていても陳腐な空間構成であれば、建築としては魅力に欠けるものになってしまうだろう。反対に合理性、必然性のないアイデアだけでは、説得力を欠き、根拠がない計画になってしまう。当たり前のことであるが、家族構成や、敷地条件、ライフスタイルをはじめとする条件をよく咀嚼したうえで、ふさわしい平面・空

図 1.21 ミニ・ハウス(アトリエ・ワン)



図 1.22 蘭越アグ・デ・パンク農園の住宅(北海道建築工房)



図 1.23 屋根の家(手塚貴晴+手塚由比)



図 1.25 梅林の家(妹島和世)



図 1.24 ZIG HOUSE ZAG HOUSE(古谷誠章)

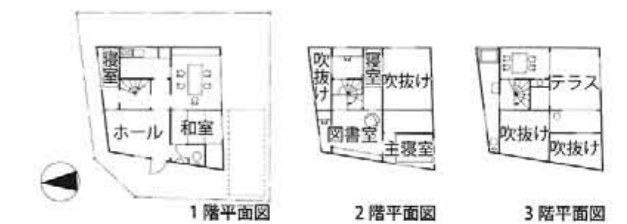
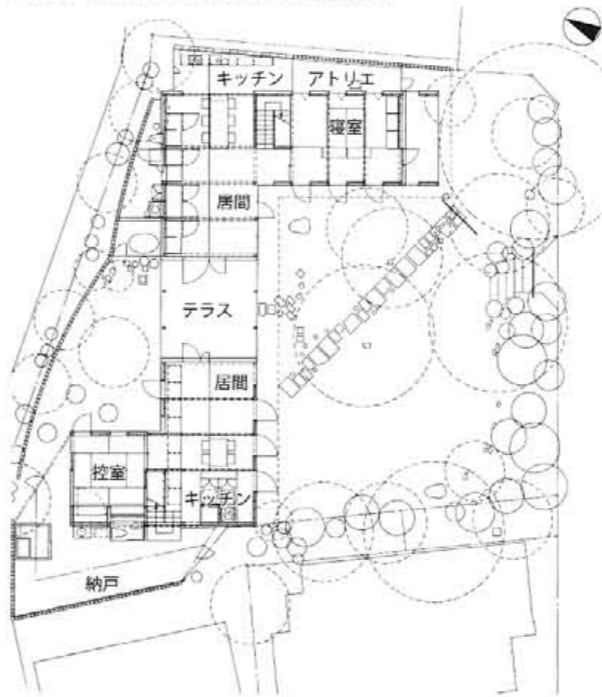
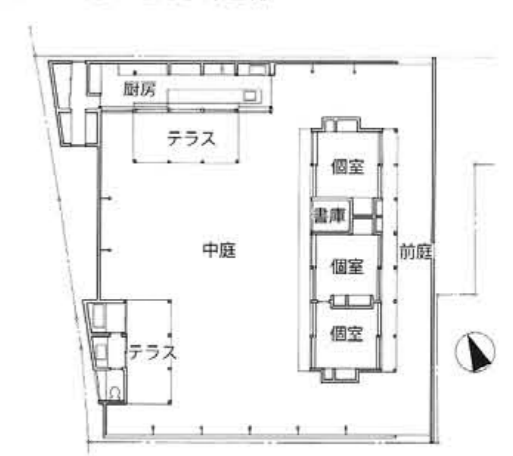


図 1.26 岡山の住宅(山本理顕)

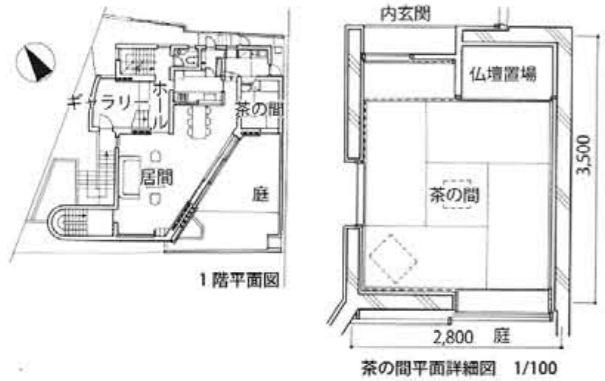


行為に使用されていたが、近年では来客用や予備室として扱うことも多い。畳の大きさに合わせ、4畳半(2.7m四方)、6畳(2.7m×3.6m)、8畳(3.6m四方)などが標準的な大きさであり、また、床座であることで開口高さや天井高さが抑えられ、比較的小規模なスケールの心地よい空間をつくることできる。居間や食堂に隣接して和室を設けて、それらの延長として使われることもある(図2.43)。

⑨家事室(ユーティリティ)ー洗濯など

家事室(ユーティリティ)は、洗濯やアイロンがけ、掃除などの家事作業に関わる設備が設けられた空間である。家事作業の機械化により、専用空間の必要性は少なくなり、家事コーナーとして居室の一部に設けられる場合もある。家事動線の効率化を考え、キッチン近くに計画されることが多いが、洗面室や浴室、物干し場、サービスヤードとの位置関係も重要である(図2.44)。洗濯などの動作空間の寸法を確保し、十分な収納スペースも必要である。単なる作業スペースとしてではなく、主婦の居場所として充実化を図り、机や椅子などを設置する場合もある。

図2.43 和室の事例(白金台の家/N設計室)



⑩クローゼット・倉庫ー収納

住宅内には、大量の物品を収納し、保管するスペースが必要不可欠である。生活に必要な物品の大きさや量、使用頻度、保管状態を考え、適切な家具や専用室に収納する。収納のための専用室としては、内部あるいは外部に設けられた倉庫や、更衣と衣服保管のためのウォークインクローゼットなどがある。

⑪玄関

住宅において内外の接点となる空間で、日本では履き物の履替えが行われる場所である。人や物の通路であると同時に、接客などの人の溜まりもあるので、それらの行為や機能にふさわしい寸法を確保する。また、靴や傘の収納や郵便受けなどが不可欠である。段差がある場合には、高齢者に配慮した計画が必要である。

玄関は家族や来客を迎え入れる空間であり、住宅の顔となるので、機能を満足させるだけでなく、様々な空間の演出が試みられる場所である(図2.45)。

⑫廊下

住宅における廊下の幅は、1人が通る動作寸法を基準とすれば80cm程度は必要である。人がすれ違う、車椅

図2.44 ユーティリティの事例(木幡の家/田代純建築設計事務所)

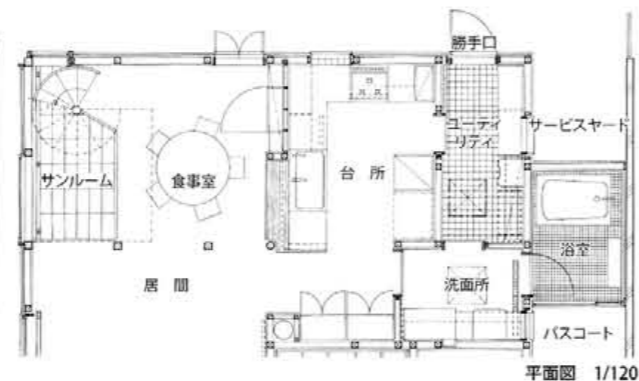


図2.45 玄関の事例(南青山の家/松寿設計コンサルティング+ジーテック)

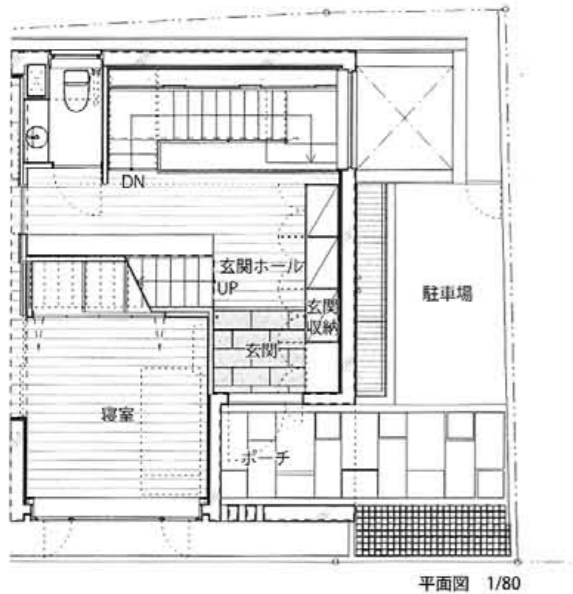
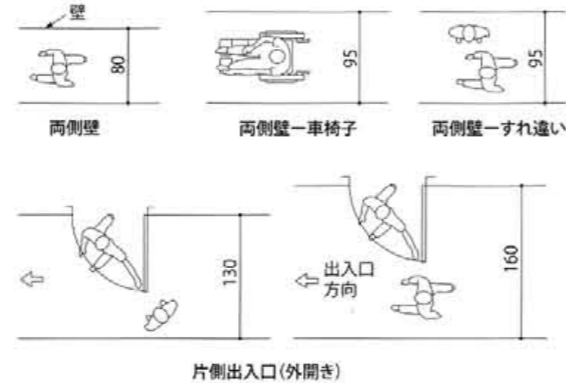


図2.46 通路の幅



子を使う、扉が廊下側に開くなど、状況に応じて、適切な幅を確保する(図2.46)。

⑬断面の設計

①建物の高さ寸法

3次元空間としての建物を計画するためには、平面寸法と高さ寸法を併せて考えなければならない。

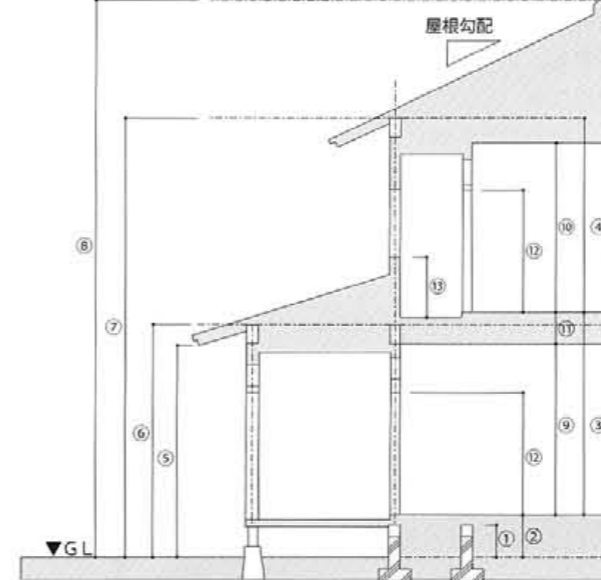
図2.47は、木造住宅における主要な高さ寸法である。建物全体の高さは、「最高高さ」や「最高軒高」で示され、法的な規制にもしばしば使われる。各階の高さを示す「階高」と、各室の床面から天井面までの高さを示す「天井高」は、相互に関連したものであるため、併せて考える必要がある。

建物各部の高さに関わる寸法は、開口部の有効高さを示す「内法高(敷居上端から鴨居下端までの長さ)」、階段の1段の高さを示す「蹴上」、地面から床面上端までの高さを示す「床高」、屋根の傾斜の度合いを示す「屋根勾配」などがある。建物の高さ寸法は、住宅の居住性能に直接関わるものが多い。

②居室の天井高

居室の衛生的な居住環境を確保するために、建築基準法で、居室の天井高は2.1m以上とされている。ただし、

図2.47 高さ方向の寸法(木造住宅)



1室で天井の高さが異なる場合はその平均をとる。居室の天井高は、室空間のボリュームやプロポーションを決定づけるので、熱や空気などの室内環境にも深く関わる。また、開放感や圧迫感など、室内の人の心理的側面にも影響を与えるといわれている。

③階段

階段は、安全性や利便性の確保が不可欠であるが、空間を演出するうえでも重要な要素である。

i) 勾配: 階段の勾配は、階段1段の高さを示す「蹴上」と階段の上面である「踏面」の寸法で決まる。階段の勾配が大きいと落下の危険性が高くなるので、適切な寸法を選択する。住宅の階段は、建築基準法施行令において、階段幅75cm以上、蹴上23cm以下、踏面15cm以上とすることが定められている。階段の勾配は、一般的には30~35度とされるが、住宅ではそれよりやや勾配の大きい階段も使用されている(図2.48)。

ii) 形状: 階段の形状には、直進階段(つぼう階段)、折返し階段(いってこい階段)、折曲がり階段、らせん階段などの種類がある。それぞれ昇降の動作や必要となる階段面積が異なるので、居住者や住宅の規模に合わせて選定するのが望ましい(図2.49)。

図2.48 階段の勾配

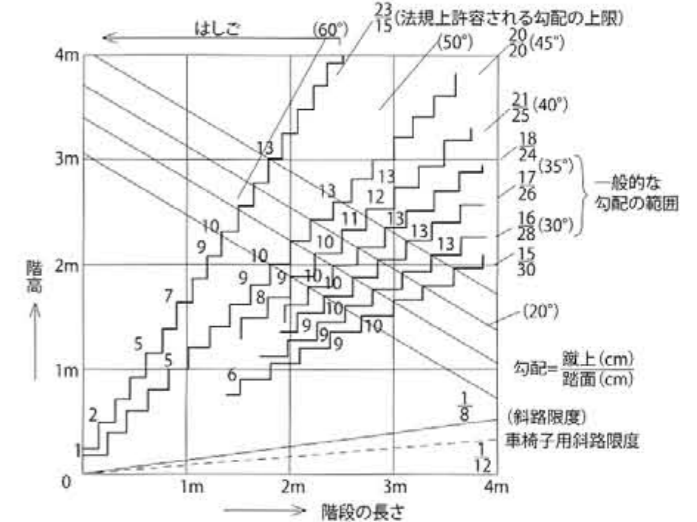
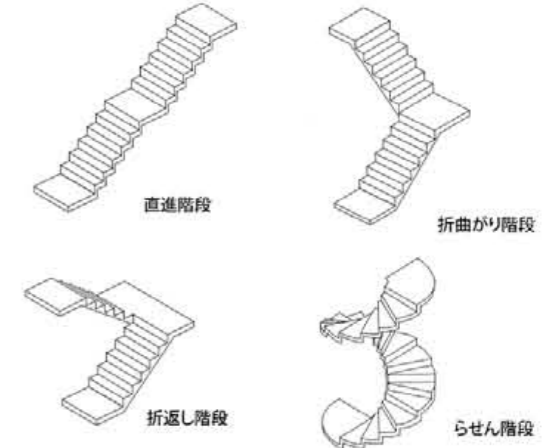


図2.49 階段の形状の種類



高さ寸法一覧表

高さ寸法	説明	高さ寸法	説明
①土台天端高	GLから	⑧最高高さ(または棟高)	GLから屋根頂部(棟木天端)
②1階床高	GLから	⑨1階天井高	1階床仕上げ面から1階天井仕上げ面
③1階階高	1階床仕上げ面から2階床仕上げ面	⑩2階天井高	2階床仕上げ面から2階天井仕上げ面
④2階階高	2階床仕上げ面から軒桁天端	⑪天井懐	1階天井仕上げ面から2階床仕上げ面
⑤1階軒高	GLから軒先下端	⑫内法高	敷居上端から鴨居下端
⑥階差天端高	GLから階差天端	⑬2階階壁高	2階床仕上げ面から下枠上端
⑦最高軒高	GLから2階軒桁天端		

物と異なり、接合金物自体が耐力を負担する接合方法もとられる。SE 構法など、特定の構造金物を用いて柱と梁を半剛接合とし、木質でありながらラーメン構造に近いものも実現できる。木造3階建てを開放的に計画するうえでも有効な構法と考えられる。設計事例に挙げた「箱の家108」(p.66)も集成材による軸組構造である。

④その他

プレファブ住宅に用いられている「木質パネル構法」は、工場生産された木質の壁パネルを建てた壁式構造である。また、丸太や製材を横に積み重ねて壁を構成する「丸太組構法」は、ログハウスとして別荘などに用いられる。

④ 鉄骨造

鉄骨造は、木造に比べ強度が高く、鉄筋コンクリート造に比べ重量が軽いので、柱のスパンを広くすることができるなどの利点がある。一方、鋼材は不燃ではあるが、耐火性能は低く、構造上重要な部分は、耐火性のある材料で被覆しなければならない。

鉄骨造の住宅の大半を占めるプレファブ住宅では、軽量形鋼(厚さ6mm以下の鋼材を曲げ加工したもの)が使用されることが多い。軽量形鋼によるものを軽量鉄骨造という。

鉄骨造の住宅には、柱・梁の接合方式において、ピン接合となる「ブレース構造」と、剛接合となる「ラーメン構造」がある。

①鉄骨ブレース構造

鉄骨の柱、梁、ブレースをピン接合することにより架

構を構成する。ブレースの接合の確実性、バランスのとれた剛性と強度を確保する必要がある。図2.67は鉄骨造(ブレース構造)の2階建て住宅である。建物全体が小さな部材で組み立てられている。2層部分には、適宜壁面ブレースが設けられ、また、1層部分に加わる水平力をこの壁面ブレースに伝え負担させる仕組みとなっている。

②鉄骨ラーメン構造

鉄骨の柱と梁を剛接合し架構をつくる。柱や梁の接合部の強度が必要となるので、一般に重量鉄骨(厚さ6mmを超える鋼材)を使用し、工場加工され組み立てられた部材を現場で建て上げ、接合して構成する。確実に接合することと座屈を防ぐ配慮が必要である。居住性能としては、揺れや振動が生じやすいことに難点があるが、特に大スパンの空間を実現できる点で優れている。

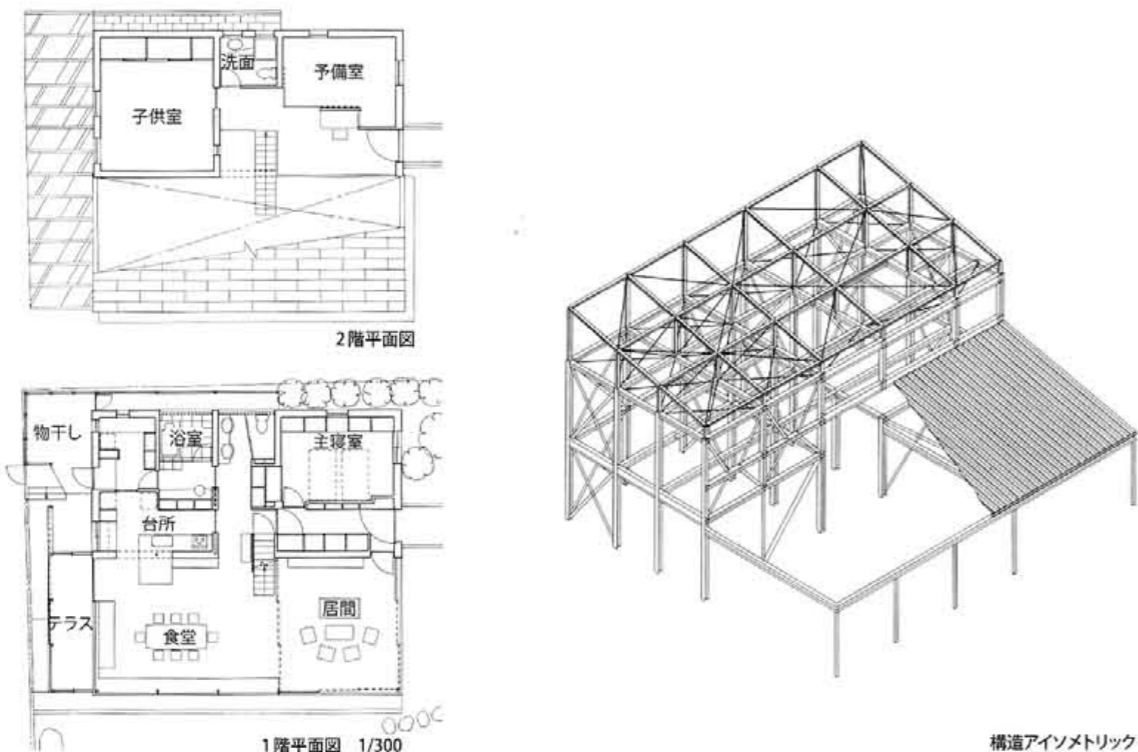
⑤ 鉄筋コンクリート造(RC造)

鉄筋コンクリート造の住宅は、耐火性や耐震性、耐久性に優れている。また、振動が少ない、遮音性が高いなど、居住性能も高い。しかし、木造や鉄骨造に比べ自重が重いので、同じ地盤でも基礎構造を強固にしなければならないなど、制約もある。設計においては自由度が高く、狭小敷地にも大空間にも適用しやすい。

① RC ラーメン構造

鉄筋コンクリートの柱と梁が剛接合された構造形式である。柱スパンは5~10mを目安とし、経済的なスパンは6~7mとされる。形状や開口位置の自由度が高いことが利点で、住宅の設計においては、大きなワンルームをとることができ、リフォームなどもしやすいと

図2.67 鉄骨造の住宅(箱の家/東京工業大学八木研究室)



いう利点につながる。反面、柱型や梁型があることによって、プランニングの制約が生じ、有効な室内面積が小さくなることもある。

② RC 壁構造(壁式鉄筋コンクリート造)

鉄筋コンクリートのスラブと壁で構成する構造形式である。ラーメン構造のように室内に柱型や梁型が出てこないため、室内はすっきりとして、スペースを有効活用できる。一方、構造設計上の制約は大きい。階高や階数の制限があり、壁量や壁厚などの規定もある。十分な耐力壁をバランスよく配置し、壁梁(梁形式の配筋を行った部分)を設けなければならない。

図2.68の「住吉の長屋」は、両側に開口部のない壁を設けて必要な壁量を確保し、敷地いっぱいの空間利用と、中央に配した光庭への大開口を実現している。狭小敷地における住宅のあり方を示すものとして、プランと構造の考え方を合致させた明快な空間となっている。

⑥ 混構造

混構造は、RC造、鉄骨造、木造などの異種の構造材料や構造形式を組み合わせた構造である。それぞれの異なる力学的性能を利用するものであり、その違いを十分

に考慮して用いることが大切である。

図2.69は混構造の事例で、2階腰壁までをコンクリートブロック造とし、その上部を木造としている。

【コラム】

鉄板を構造とした住宅

近年、鉄板を構造とした建築が登場し、住宅でも様々な試みが見られる。16mm厚の鉄板で内外の壁を構成する「梅林の家」(妹島和世、佐々木睦朗)、リブ付き鉄板を床、壁に用いた「江東の住宅」(佐藤光彦、金箱温春)などは、床や壁をつくる面材としての鉄板が柱、梁、ブレースの機能を合わせもつ。また、「上原の家」(みかんぐみ、金田充弘)は、板材を組み合わせた書棚が柱の機能を担っている。IRONHOUSE(椎名英三、梅沢良三)は、折版を両側から鉄板で挟んだサンドイッチパネルによって、床、壁、屋根のすべてを構成しているが、厚さ100mmのサンドイッチパネルには断熱材が充填されて、断熱性を高める工夫が施されている。鉄板を構造とした住宅は、薄い壁の実現、構造材と仕上げ材の一致などに新たな可能性を見いだすことができる一方で、住宅性能として不可欠な断熱性や遮音性に対する配慮も必要である。

図2.68 RC造の住宅(住吉の長屋/安藤忠雄建築研究所)

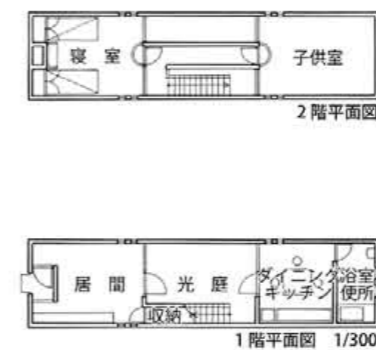
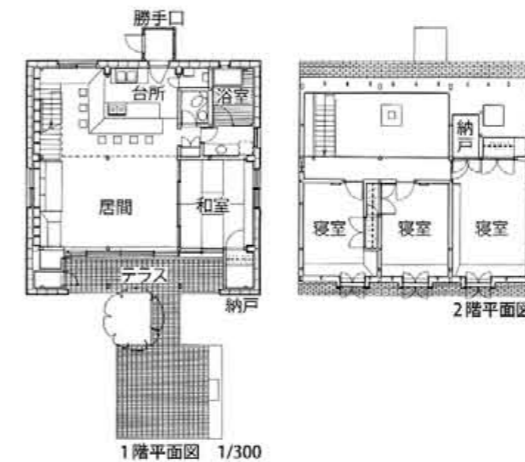


図2.69 混構造の住宅(さとうボックス/宮脇建建築研究室)



住居 No.18 伊東・織りの家



敷地は伊東にある北斜面で、山林に囲まれた自然豊かなところであるが、30度以上の急勾配、風化安山岩の推積した脆い地盤、多震地域という厳しい条件の土地である。敷地にできるだけ人工的な手を加えないようにとの配慮から、接地面積をなるべく少なく抑え、建築をマッシブな形状とした。深礎を打ち、基礎、スラブ、擁壁を一体化し、ひな壇のような人工地盤をつくった。人工地盤の上は建物を軽量化するため木造とした。

素材は人工的に手を加えられたものではなく、できるだけ自然に近いものを選んだ。床は仕上げ材としてはかなり動きの激しい厚さ34mmの唐松の足場板を使用した。施主の要望

もあって装飾としてのディテールは極力減らし、単純で骨格がはっきりした空間をつくるように設計を進めた。

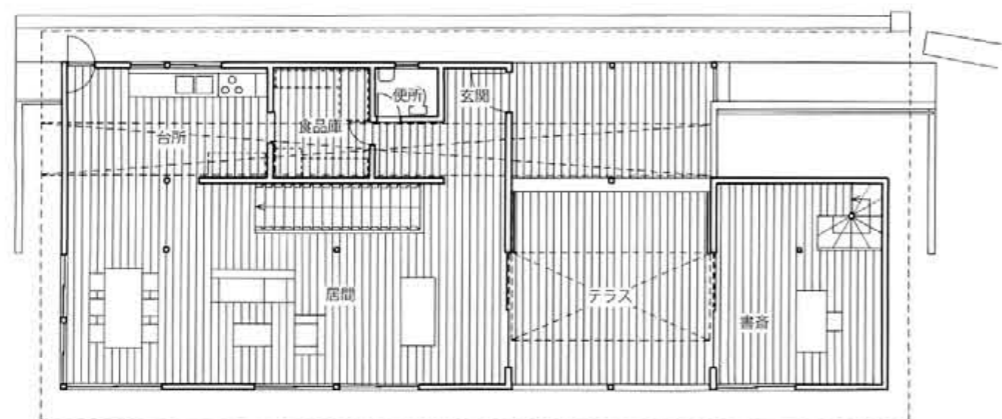
2階は北斜面の条件を建築的に克服するために、棟のところには幅の狭いトップライトを線状に設け、南の光が内部空間にいつも入ってくるように配慮した。この光が、空間に様々な表情を与えている。

建て主は斜面の緑の中に置かれたこの建物をベースに、のびやかな生活を送っている。建物は、次第に住み手の色に染められ、木を植え、道をつくり、環境を整え、インテリアを充実させていった。建物が竣工して時間が経過しているが、内も外も年々充実し、変わり続けている。(内藤廣)

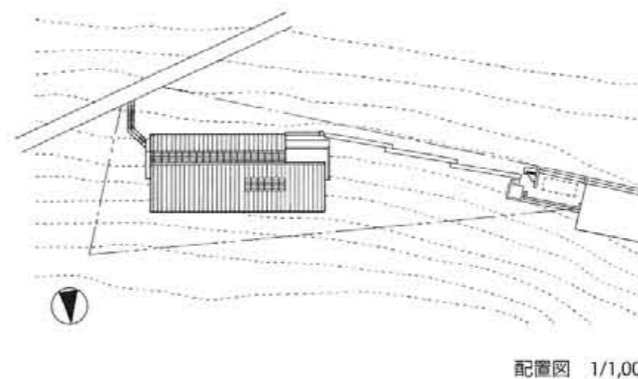


■建築概要

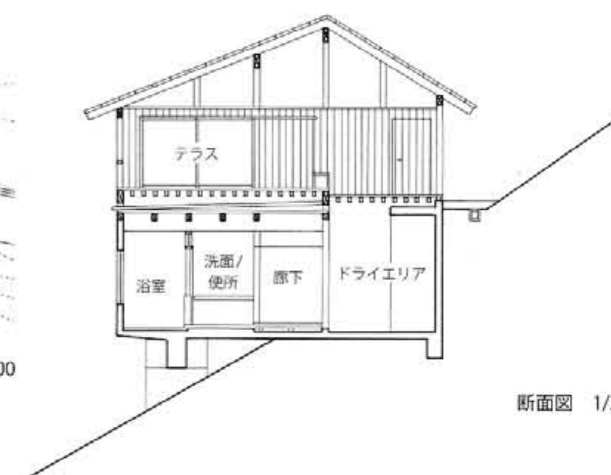
敷地面積 / 852.24 m²
 建築面積 / 151.74 m²
 延べ床面積 / 239.22 m²
 1階 116.64 m²、2階 122.58 m²
 建ぺい率 / 17.8% (許容 40%、別荘地自主規制)
 容積率 / 28.0% (許容 80%)
 階数 / 地上2階
 構造 / 木造+一部鉄筋コンクリート造



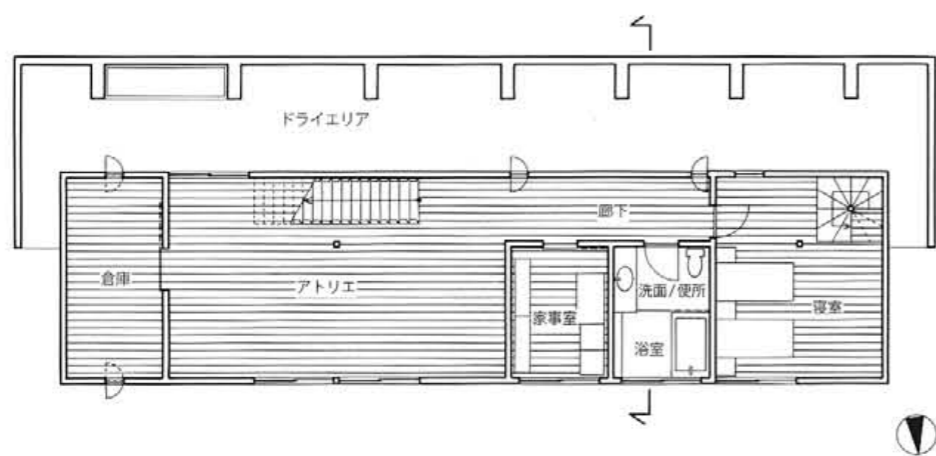
2階平面図



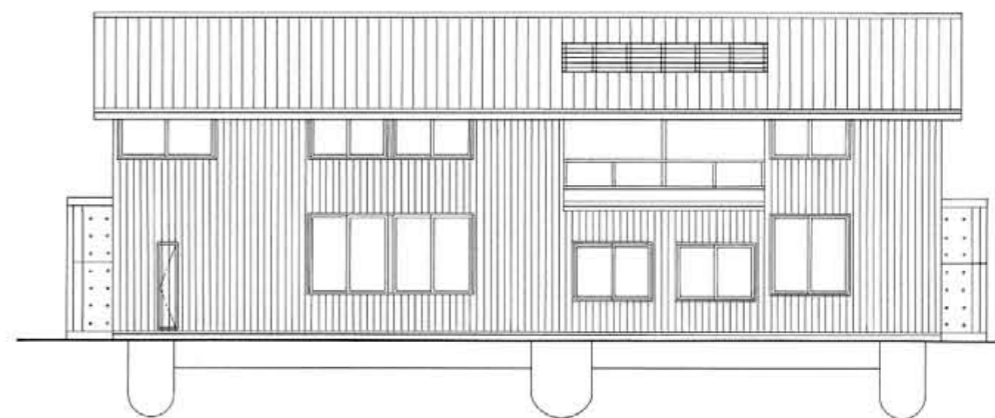
配置図 1/1,000



断面図 1/200



1階平面図 1/200



北立面図 1/200

ハウス&アトリエ・ワン



アトリエ・ワンの事務所兼用住宅である。事務所と住宅が一棟の建物に同居するメリットを追求した結果、事務所(下2層)と住宅(上2層)を完全に分離するのではなく、あえて一体化している。内部空間は様々な広さの踊り場を居室としたスキップフロアとそれに隣接する床の積層によって構成され、各フロアは階段室によってつながる。北側斜線によって傾いた外壁に合わせて柱列が傾き、空間に揺らぎを生み出している。窓からは周辺の風景が切り取られる。旗竿地に建っているため、表通りから建物はほとんど見えない。いわば内部しかない建物である。この内外

の関係が建物を面白くしている。連続した縦の吹抜け空間には、井水を利用したヒートポンプによる輻射式冷暖房システムが設置されている。約15℃を保つ井水によって、省エネに貢献している。

(文責・編集担当委員)

■建築概要

敷地面積 /109.03 m²
 建築面積 /60.94 m²
 延べ床面積 /218.67 m²
 地下1階 54.04 m²、1階 58.49 m²、
 2階 54.47 m²、3階 47.69 m²
 建ぺい率 /55.89% (許容 60%)
 容積率 /156.76% (許容 160%)
 階数 / 地下1階、地上3階、塔屋1階
 構造 / 鉄骨造+一部鉄筋コンクリート造



2階平面図



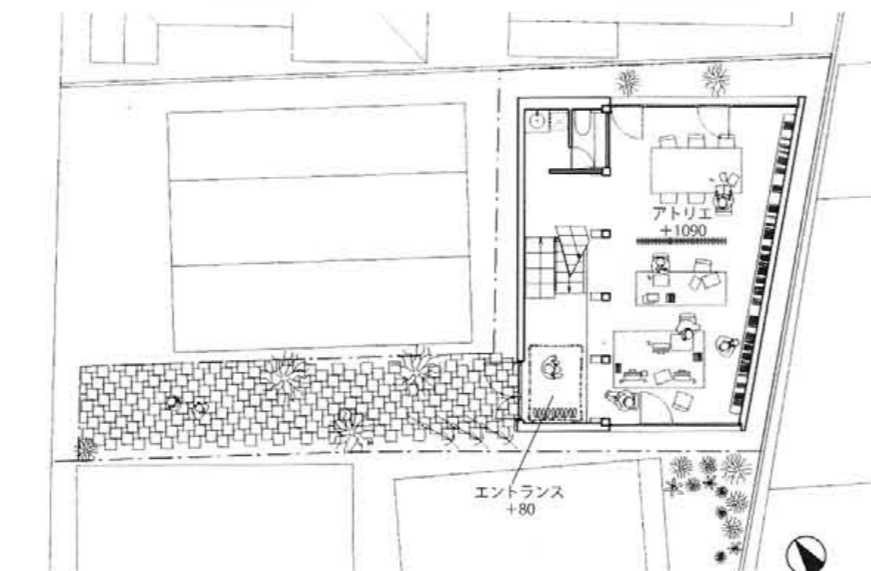
3階平面図



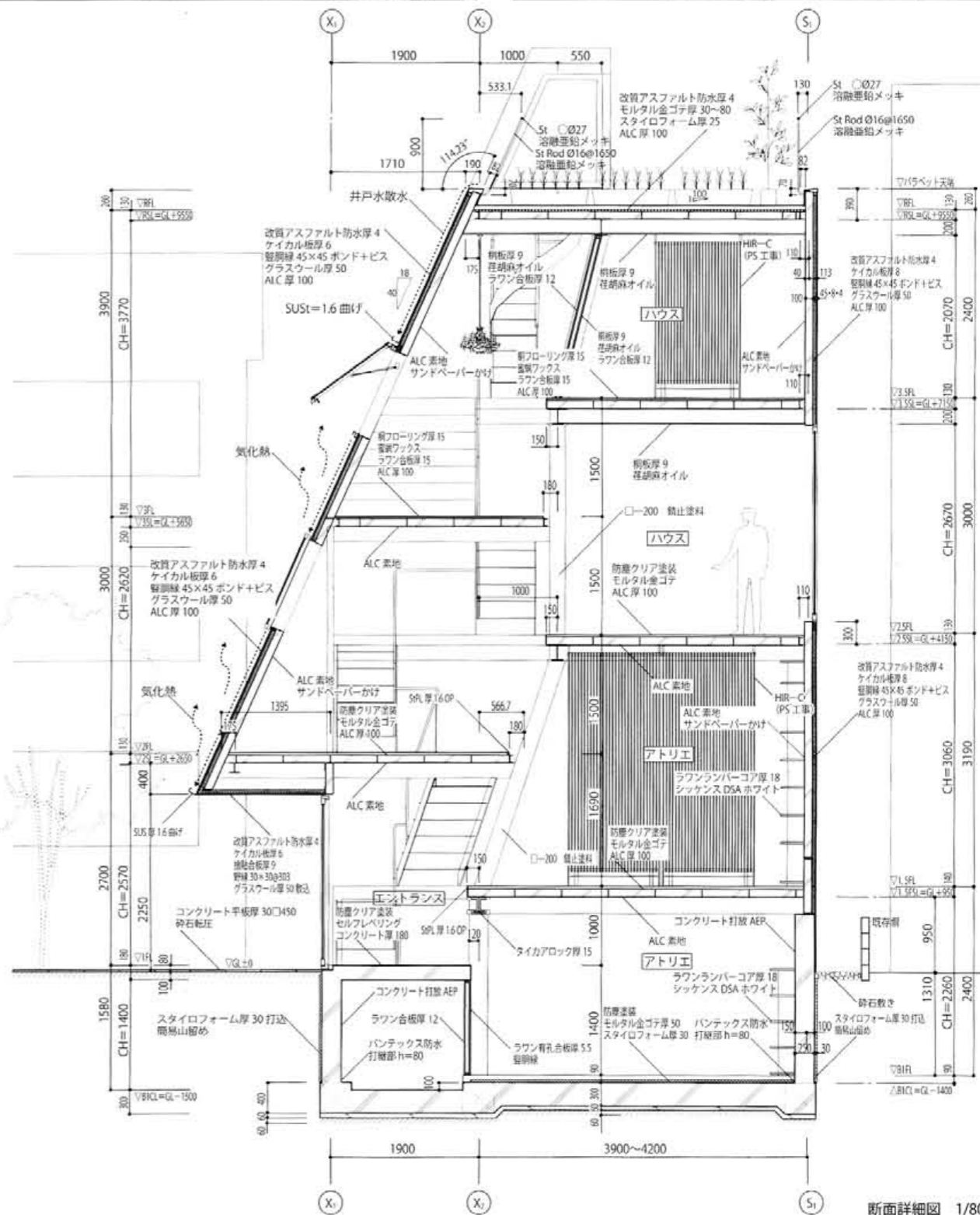
屋上階平面図



地下1階平面図



1階平面配置図 1/200



断面詳細図 1/80